

して行なっている。すなわち、Hoffert *et al.* (1980) のモデルを使用し、第6章第6節における予測と同じ放射強制力とパラメータを与えている。

IPCC 第1作業部会報告書(9.4.1)では、湧昇拡散エネルギー平衡気候モデルの一般的な参照として Hoffert and Flannery (1985) が上げられているのである。

以上から、Hoffert *et al.* (1980) を引用するのが正しいと考える。

(3) IPCC 第1作業部会報告書において、海洋の熱膨張による海面水位の上昇に関して言えば、(2)で述べたとおりであり、Wigley and Raper の研究を中心にまとめてあるとは言えない。

(4) 根本氏は、私の「解説」が最も読みにくい、なぜ平易に日本語で解説できないかと指摘している。

私は、この「解説」において、気候問題懇談会温室効果検討部会におけるレビューを基に、IPCC 第1作業部会報告書の内容を海洋、山岳氷河、グリーンランド氷床、南極氷床の問題についてやや掘り下げて書いた。

このために、内容をかみ砕いて一つのまとまったものとして書いていないために、読みにくいという印象を与えたのかもしれない。

「天気」の解説は、いわゆる読物というよりも多少読みにくても科学的根拠を明確に示した方がよいと思う。この両者を両立できなかったのは著者の力量が不足しているためである。

ただ、読者としても「天気」の解説を読む時は、それなりの心構えが必要であるように思う。

『WMO/UNEP IPCC 第四回会合から』の小文に関する、根本氏の意見について

黒 沢 真 喜 人

その主旨は、『出席者から、くわしい報告がききたいところだが』筆者が『自分の報告を半ページにひかえてまで、学会誌に…IPCC (policymaker のための科学的知見) の要約だけをのせた真意を理解することができない』とまとめられよう。

筆者の意図は、以下のとおりである。①会議における審議内容については(まさに、学術誌への報告には、なじまない)単に『参加各国が多様な立場を反映して』難航した会議の雰囲気と述べるにとどめた、②この会議で採択された、IPCC first assessment report; overview の、science 部の全文(当時における気象庁の仮訳)の紹介は、その当時の国内の(断片的な)報道を補完する意味を持ち、また、その内容・表現のニュアンスを通して、国際的課題としての地球温暖化防止問題の複雑さを伝え、さらにはこれに満足しない会員が、これを手引に、作業部会(WGI)の報告書等々に遡及するなどして、各自の知見を深める一助となりうる…これが筆者の意図である。若干の補足をさせていただくと、

① 会合の『くわしい報告』について；IPCC 第四回

会合は、周知のとおり、以後の関連国際会議(第二回世界気候会議、国連総会、温暖化防止枠組条約交渉会議等々)の場に提供する report の審議・採択が主要議題であり、科学的知見が対象のシンポジウムやワークショップ等とは全く別。紛糾排除のため作業部会の報告書に明記のない意見・知見は全く容認しないことを前提とする会議であった。会議事務局による総合報告書案は、図表を含むかなり詳細かつ合理的と思える内容であったが、審議難航(主にWGⅡ及びⅢ関係で難航)の余波で大幅に圧縮して採択された。ただ難航の詳細は、本誌にはなじまないと筆者は考えている。

② 『IPCC の…要約だけをのせたこと』について；載せたのは採択された report の science 部分である。掲載の意図については既に述べた。極めて慎重な表現—各国の主張を反映しバランスに配慮した表現になっているのを、読み取れると思う。この report が『ゴジで示された二つの見出し』のような『現在の確信だけで語られて』いるとする見解には、同意できかねる。